新・連載

千葉の近現代史を創った男の話 ⑧

千葉国体、両陛下のお宿がない！
「ニューパークホテル」と「グランドホテル」を建設

武田　弥太郎

櫻井俊雄氏

千葉県での国体は過去に二度開催されている。

平成22年の第65回国民体育大会は北海道と千葉県で開催されたが、それよりさかのぼること37年、昭和48年にも第28回若潮国体が千葉県で行われた。

冬季大会が岩手県と新潟県で、夏季と秋季大会が千葉県で開催された。日本体育協会理事や副会長、国民体育大会会長を務め、日本のスポーツ界に大きな影響力を持っていた山口久太に深い薫陶を受けていた俊雄は、昭和の一葉国体にもかかわることになった。

久太は国体開会当日、昭和天皇のご案内役などの重要な務めを果たすなどしているが、昭和の千葉国体開催が決まった折、千葉市には陛下にお泊りいただけるだけのホテルがないことが問題となった。

かつて軍都だった千葉市、市中心部には運河（当時は吾妻町、現在の中央二丁目から四丁目あたり）と呼ばれていた全国でも有数の花街があったことから、多くの旅館や料亭がひしめいていたが、ホテルはなかった。

国体会長である久太と、千葉県の国体責任者で、のちに知事になる当時副知事の川上紀一は、開催決定後、警備体制の面からも「陛下のお宿」問題に苦慮していた。

様々な事情で二件のホテルが必要だったことから俊雄たちは東奔西走して、結局、吾妻町で旅館業を営んでいた新生さんに要請し、度重なる折衝の末、新生さんが「ニューパークホテル」を、能勢さんが「グランドホテル」を建設することになり、千葉国体に間に合うよう建設が進められた。

関係者の協議の末、昭和天皇ご夫妻が「ニューパークホテル」に、皇太子ご夫妻（現在の上皇ご夫妻）が「グランドホテル」にお泊りになられ、「陛下のお宿」問題は無事に解決を見ている。

その両ホテルの一方が近年閉鎖されたことはとても寂しいと俊雄は嘆く。俊雄は千葉での若潮国体の前年、鹿児島県で開催された太陽国体に視察に出かけている。

翌年の千葉国体開会式で両陛下がお座りになる座席や調度品をどう用意するか、鹿児島大会の御座所のご様子を、せめ、見聞しておきたいと考えたからだった。

俊雄は視察の成果を生かして千葉国体での華やかな一面を醸しだすことに貢献ができたと思い起こしている。陛下のおそばでお仕えする立場の久太の一助になったのであれば幸せであり、陛下のご予定の一端に少しでもお役に立てたのなら望外の幸せだったという。

千葉には国際規格のプールもなかった。俊雄は千葉市の総合運動場への水泳場建設にも尽力した。

ここで国体の水泳競技が開かれた。資金の確保、業者の選定、スポンサーの確保など、現在とは様々な制度が異なる中、人脈を生かして成功に向かって努力したという。

ただ、ここでも俊雄の性格が出てしまっている。なんの見返りも求めておらず、ほとんどすべて手弁当で駆けずり回ったことだ。いまの政治家たちならどうするだろう。

議員報酬をもらいながら大して役に立たない中、減私奉公的に公のために働く政治家がほとんど見当たらないと俊雄は嘆いている。

随想

更級日記の中の黒砂

鎌谷希一・元稲毛小校長　鳥津雪生

市原市に更科通りと言うのがあるのを知ったのは4年前市原市中央図書館に「日本点学の創始者石川倉次展」を見に行った時だ。石川は昔、私が在職し幕張小の初代校長だったことは知っていたがその所在地は未だ確定されてはいない。

それは別として平安時代（寛仁元年）1017年、菅原孝標（有名な道真の孫にあたる）が45歳の時上総介に任ぜられ寛仁4年に任期満了となり家族とともに上総国府（古甲遺跡）に帰ることになった。その際に父母や兄姉と同行していた娘（名不詳13歳）が旅行記をたためた。その娘が晩年になりこの時の旅行記を基に書いた回想録が更級日記である。書名は長野県の更科と言う地名に由来すると言う。

更級日記は§§首の和歌により出来ており、①物語に憧れる少女、②京への旅立ち、③道の跡くろとの浜、④乳母を見舞って、と続く。千葉の最終は松戸である。③のくろとの浜で「まつ言葉ならではいつか見むくろとの浜の秋の夜の月」を詠んでいる。

今なら中学1年生の句である。当時の黒砂を「片つ方はひろ山なる所の砂子はるばると白きに松原茂りて、月いみじう明かき、風の音もいみじう心ぼそし。」とあり、片側は小高く広がった所で遥かに松林が茂り折から月が出て両陛下がお座りになる座席や調度品をどう用意するか、鹿児島大会の御座所のご様子を、せめ、見聞しておきたいと考えたからだった。

俊雄は視察の成果を生かして千葉国体での華やかな一面を醸しだすことに貢献ができたと思い起こしている。陛下のおそばでお仕えする立場の久太の一助になったのであれば幸せであり、陛下のご予定の一端に少しでもお役に立てたのなら望外の幸せだったという。

千葉には国際規格のプールもなかった。俊雄は千葉市の総合運動場への水泳場建設にも尽力した。

ここで国体の水泳競技が開かれた。資金の確保、業者の選定、スポンサーの確保など、現在とは様々な制度が異なる中、人脈を生かして成功に向かって努力したという。

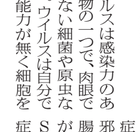
ただ、ここでも俊雄の性格が出てしまっている。なんの見返りも求めておらず、ほとんどすべて手弁当で駆けずり回ったことだ。いまの政治家たちならどうするだろう。

議員報酬をもらいながら大して役に立たない中、減私奉公的に公のために働く政治家がほとんど見当たらないと俊雄は嘆いている。

エッセイ

正体見たり新型コロナ

「痴呆爺のクオーターライフ」　河邊　伊知郎



第一章　自然免疫と獲得免疫

体内には自然免疫と獲得免疫がある。自然免疫は人類が基礎的に持っている免疫システムでマクロファージや樹状細胞、好中球、NH細胞などである。それらが侵入した敵を発見すると、まずは好中球マクロファージといった細胞が細菌やウイルスを食べるようにやっつける。そして樹状細胞を活性化させます。次に樹状細胞は病原微生物を食べて消化し、その成分を細胞の表面に出し、詳細な情報をT細胞と呼ばれるリンパ球に提示します。

詳しい情報を知ったT細胞が敵を集中攻撃したり、抗体を作るB細胞であるリンパ球に指令を出したりします。抗体を作らせたりします。この流れは「自然免疫→樹状細胞→獲得免疫」となります。

第二章・コロナはウイルス？細菌？

ウイルスと細菌は大きさに違いがあり、細菌は顕微鏡で見えますがウイルスは電子顕微鏡で無ければ見えません。

ウイルスの大きさは不織布マスクの穴の50分の一で、マスクは軽々と通り抜けてしまいます。そして空気中に無数漂っています。

ウイルスは感染力のある微生物の一つで、肉眼では見えない細菌や原虫などです。ウイルスは自分では増殖能力が無く細胞を持たない構造で、他の生物の細胞を利用して自己を複製させます。遺伝子を持っているので生物的な面と非生物的な面をもつ、人類など生物の細胞に入り込み病原体となる場合があり、生命誕生とともに共生してきました。コロナウイルスもインフルエンザも太古から生き物と共生をし、変異を繰り返してきました。

二十世紀には新興感染症と言われるスペイン風邪、エボラ出血熱、エイズ、腸管出血性大腸菌感染症が発生し二十一世紀には増殖する。これが新型コロナウイルスだ。

インフルエンザもコロナも変異を繰り返してきピーが発生しやすく、常に変異と増殖を繰り返し、徐々にマイナーチェンジしながら生き延びてきた。増殖率も高く、一個のウイルスが一日で百万個以上に増殖する。これが新型コロナウイルスだ。

インフルエンザもコロナも変異を繰り返してきた風邪と言える。

一度かかれば免疫が出来て、同じ風邪にはかからないが、変異した新しい風邪にはかかってしまうのが、この原理だ。

第三章　日本はなぜ死者数が少ない？

コロナは元々無症候性の風邪でかかったのが分からないうちに治ってしまったりする。突然、死に至せる症状になったりする。

治療方法としてはエクモ（人工肺）が不可欠になる。そんな映像をみて、国民は恐ろしさに固まってしまった。エクモが足らない、医療崩壊が始まって病院に行けなくなる。」等々、恐怖のどん底のスパイラルに陥ってしまった。

しかし、日本では何故死者数に違いが出てしまう。そしてショッキングな映像が世界を巡った。肺血栓症肺炎だ。原因はサイトカインストーム（免疫暴走）で、先に説明した免疫システムのT細胞が過剰に活性化し自身の免疫細胞に攻撃を加えたり、血管を傷つけ、血液が血管内で塊りとなり、血管を詰まらせ死に至らしめる